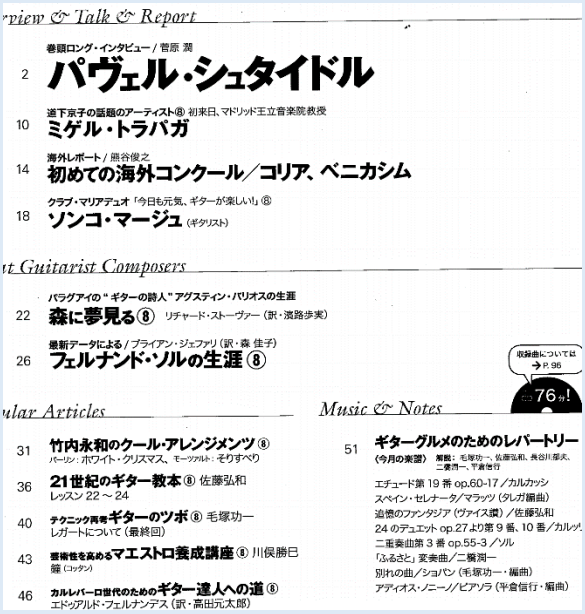
Guitar dream　NO.8(2007. 12)の紹介　by yakateru

表紙



メイン目次

【巻頭ロング・インタヴュー　抜粋・概要】　パヴェル・シュタイドル

1961 年プラハ生。8 歳の時にギターを始め、プラハ音楽院でミラン・ゼレンカに師事。アベル・カルレバーロとデイヴィッド・ラッセルにも教えを受けた。1982 年、パリ国際ギターコンクールに優勝。現在、彼はオランダやヨーロッパ各地で演奏家として、また教授者として忙しい日々を過ごしている。彼は 19 世紀ギターをレパートリーに取り入れたコンサートも行なっている。作曲家としても知られる。ギターの魔術師と呼ばれる。

シュタイドルというギタリスト、知りませんでした。パリコンの優勝者です。

- 最近の録音で、即興やクラシック演奏家ならまずやらないようなことをやってみた。それは・・ワインを飲みながら演奏するとか（笑）・・・・。
- 現代のギターで使っているのは、レーミッヒ、ガルシア、エステーソ、シンプリシオ、ハウザー。
- 製作家はギターの音をどんどん大きく、強くしようとしているが、私には美しいものが失われているように思える。問題は、楽器にあるのでなくて、コンサートをするホールの音響にある。
- 音楽で本当に重要なのは、どこに緊張があり、どこに緩和があるのかを知ることだと思う。機械的に弾いてはダメで、寄せては返す波のように弾かなくちゃいけない。そのためには、音楽で何を話しているのかをはっきり自覚しなければいけない。
- 素晴らしい音楽家から学んだことがある。音楽には 3 つの要素しかない。肉体、頭脳、精神だ。好きな音楽は、この 3 つをすべて備えている。
- ギタリストにならなかったら料理人になっていると思う。コンサートのプログラムも、一流のレストランのメニューのように、健康によく、甘すぎず、苦すぎず、熱すぎず。冷めた料理は NG だ。
- 演奏とは、音楽を機能させるために必要な文法のようなものを踏まえて、自分やその音楽が言いたいことを表現することだと思う。しかも、その表現方法はたくさんある。
- 私たちも演奏する時には、音楽にストーリー性や詩情を与えて行かないといけない。

【話題のアーティスト紹介　ギタリスト　ミゲル・トラパガ】

ギターを教える際の姿勢で、タレガと比較し現代の姿勢のスタイルのモデルになっているスペインのギタリストであるトラパガ氏のインタビュー記事です。今回の来日情報、CD 情報が話題の中心です。後半では、今の王立音楽院ギター科教授の仕事、生い立ち等が語られます。

【クラブ・マリアデュオのインタビュー：ソンコ・マージュ】

ソウデシタカ、ソンコ・マージュ（ソン・コマージュではなかった）は、栃木県栃木市出身の日本人で、本名は荒川義男さんというそうで。ユパンキの弟子ということは知っていましたが、日本人でしたか。

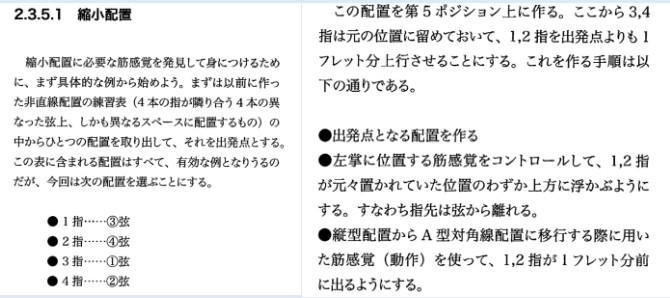
- ギター演奏家も 50 歳ぐらいで夢中になって弾いているうちはダメですよ。ギター界でも 65 歳ははなたれ小僧でいい。それぐらいの気構えが重要だと思う。
- 楽譜に頼っていないで、心を表現する。手で弾くんじゃない、心で弾く。テクニックはある程度必要だが、でも、ある程度たったら脱却して心で弾く、その先にある音楽が重要です。
- 最近の音楽はつまらなくなった。ユパンキやセゴビアが生きてた頃より民度（人間の考え方）が落ちていると思う。当時は、あっと燃え上がるようなものを感じましたね。でも、現在は、心に響く音楽を受け入れられないような社会情勢だ。こういう時代にこそ音楽家の使命がある。
- 言葉なんかはいくらでも美化できるけど、音楽は美化できない。
- 静寂の中にいなければ哲学的になれない。日本はうるさくてかなわない。パンパ（南米・アルゼンチン中部のラプラタ川流域に広がる草原地帯）は本当に静かでした。
- 音楽というのは、有名になるなってことより、自然が絶えず出しているメッセージを感知して音に出す。自然を体現する。それが芸術家の使命だと思う。

【マエストロ養成講座　第８回】

アルフレッド・コッタンの「鐘」という曲ですが、作曲者のコッタンは知りませんでした。もちろんこの曲も。コッタンは、タレガが「アルハンブラ宮殿の思い出」を献呈した人物だそうですが、ネットでは残念ながら検索に掛かってきませんでした。曲は、シンプルですが軽快な馴染みやすい曲です。

【ギター　達人への道　第８回】

さてさて、第８回になるフェルナンデスの講義。今回もかなり理解するには苦労が必要かと。まず、「縮小配置と拡張配置」について論じます。んんんんん・・・わからない。これをこの８回まで理解して納得して続けている人はいるのだろうか・・・・・(一部、下記に掲載してみます。わかるかな？)



2.3.5.1　縮小配置

縮小配置に必要な筋感覚を発見して身につけるために、まず具体的な例から始めよう。まずは以前に作った非直線配置の練習表（4 本の指が隣り合う 4 本の異なった弦上、しかも異なるスペースに配置するもの）の中からひとつの配置を取り出して、それを出発点とする。この表に含まれる配置はすべて、有効な例となりうるのだが、今回は次の配置を選ぶことにする。

- 1 指……③弦
- 2 指……④弦
- 3 指……①弦
- 4 指……②弦

この配置を第 5 ポジション上に作る。ここから 3,4 指は元の位置に留めておいて、1,2 指を出発点よりも 1 フレット分上行させることにする。これを作る手順は以下の通りである。

- ●出発点となる配置を作る
- ●左掌に位置する筋感覚をコントロールして、1,2 指が元々置かれていた位置のわずか上方に浮かぶようにする。すなわち指先は弦から離れる。
- ●縦型配置から A 型対角線配置に移行する際に用いた筋感覚（動作）を使って、1,2 指が 1 フレット分前に出るようにする。

【その他の注目すべき記事】

- 「21 世紀のギター教本：佐藤弘和」：今からギターを始めようという人、基礎からもう一度やり直そうと考えている人向けの教本。８回目は、大セーハ、リズムのついたスラー、変則調弦の話です。
- 「クール・アレンジメント：竹内永和」：12 月号ということもあり、「ホワイトクリスマス」「そりすべり」のソロアレンジが掲載されている。今年のクリスマスには、この楽譜、使えそうです。
- 「ギターのツボ：毛塚功一」：初級・中級者向けのに演奏テクニックの再考を行うための記事。第８回は、レガートの最終回ということで、抑揚、メロディ、リズム、音質とのかかわりを解説しています。

その他、「海外レポート」等もあります。第８号のメインは、そんなところでしょうか。第７回では、何だか急に内容が薄くなってきた気がしましたが、持ち直しました！！

また、Guitar dream には、楽譜と模範演奏 CD がついている。今回は、下記の楽曲が掲載されている。

ギターグルメのためのレパートリー

マテオ・カルカッシ

エチュード op.60-19

《25 の練習曲集》の中でも練習価値の高い曲です。高音のメロディーとバスラインをよく味わって演奏し、伴奏は重く堅くならないようにします。伴奏は *imim* がオーソドックスな運指ですが、*pipi* や *pmim* でも可能です。最も演奏効果のあがる運指を選んでください。数だけは間違えないように。全体的にカチカチと刻む感じよりも流れるような曲調に仕上げましょう。

（毛塚功一）

ホアキン・マラッツ（タレガ編曲）

スペイン・セレナータ

マラッツはバルセロナ生まれのピアニスト。彼の残したピアノ作品はほとんどが忘れられており、この《スペイン・セレナータ》はタレガの編曲により世に知られるようになりました。技術的には決してやさしくはありませんが、歌い回し、ポルタメント、ビブラートなどの音色において、楽器の魅力を十分に引き出してくれる作品といえます。

（毛塚功一）

佐藤弘和

追憶のファンタジア～渡辺範彦先生の思い出に

渡辺範彦先生追悼の曲、第 2 弾です。先生（門下生は師匠と呼びますが・・・）の十八番だったヴァイス《ファンタジー》の前半部分を下敷きにして、完全にヴァイスの曲だとわかる形で自由にヴァリエーションしてみました。原曲を知らない人は、原曲を聴いたり、弾いてみたほうがより楽しめます。後半に師匠の名前の音列とファンタジーのフーガ部分のテーマを引用していますので意識してください。全体的に即興的で自由な息遣いを持った雰囲気で演奏してください。

（佐藤弘和）

フェルディナンド・カルッリ

24 のデュエットより（ギター教則本 op.27 より）

第 9 番は冒頭の会話を楽しむようなフレーズのやり取りが楽しい 1 曲です。頭の欠けたリズム＝アウフタクトでのやり取りですから、音形のはじめの音に軽いアクセントを付けるとその様子がはっきりするでしょう。また休符をちゃんと守ることも大切です。17からのフレーズは動いている音がメロディラインですから目立つように、かつレガートに弾きましょう。裏拍の音＝ミはセカンドとあわせてオクターブで響きますから、ともすると強く聞こえがちです。

第 10 番はアレグレットですから軽快に。フランスの舞曲“パスピエ”のような雰囲気ですね。冒頭は軽いスタッカートで 8 分音符のビートを際立たせると緊張感のある軽快さを演出できるでしょう。こちらの曲も17から裏拍のミがオクターブで響きます。強く出てしまうと重たく感じられるので気をつけましょう。16 分音符のメロディが続く33からはぜひレガートに弾きたいところ。またドラマチックな箇所でもありますから、*p* から *f* までダイナミクスの幅を大きく使って効果的に作りましょう。

（長谷川郁夫）

フェルナンド・ソル

二重奏曲第 3 番ハ長調 op.55-3

Op.55 の第 3 曲は形式が少し変わり、第 1 楽章が「序奏、主題 (Andante) と3つの変奏」となっています。その後の第 2 楽章はやはりお決まりのワルツですが。3 つの変奏は、8 分音符中心の主題が「16 分音符」「短調」「16 分音符の 3 連符」とだんだん音が細かくなっていくもので、これも典型的な変奏曲のスタイル。古典派音楽の粋を充分に感じさせてくれるソルの作品は、ギターにとってまさに貴重な財産と言えるでしょう。

（佐藤弘和）

二橋潤一

「ふるさと」変奏曲

広く知られている「ふるさと」を主題とする変奏曲です。今回は、序奏と主題、モーツァルトの様式による第 1 変奏、シューベルトの様式による第 2 変奏まで。この後シューマン、フォーレ、ラヴェル、バッハが続く予定です。

（二橋潤一）

フレデリック・ショパン（毛塚功一・編曲）

別れの曲 op.10-3

ショパンの代名詞とも言えるこの曲が「練習曲」であることに驚いたのを覚えています。古い楽譜には「Sadness」と副題があったようですが、別れの悲しみと抒情的な表現を追求するための練習曲だったのでしょう。原曲ピアノ譜の解説には「完璧なまでのレガートの追求」とあります。曲は長調（原調はホ長調）で書かれていますが、その明るさがなんと悲しく響くのでしょうか。ピアノの演奏に近づけるもよし、ギターの表現を模索するもよし、それぞれ思い思いに演奏しましょう。

（毛塚功一）

アストル・ピアソラ（平倉信行・編曲）

アディオス・ノニーノ

ピアソラがアメリカでの修行中に父の訃報を聞き、思いがあふれ、一気に書いた作品といわれています。A メロは 2 小節を一つの固まりとし、キッパリと弾いていきます。B メロは、淡々と流れるベースのリズムの上に感情を込めてメロディーをのせてください。そして、C では思いあまった感情をぶつけるようにテンポを上げて激しく弾いていきます。各部へ移り変わるテンポ・チェンジがなめらかになるよう各パート、イメージをそろえてください。ラスト 8 小節は悲しみあふれる葬送のイメージでアレンジしてみました。

（平倉信行）